

1年の締めくくり

打ち寄せる波のように繰り返すコロナ禍のうねりの中、2022年を閉じようとしています。また、2月に始まったロシア軍によるウクライナ侵攻は世界中を震撼させ、ミャンマーやアフガニスタンなどでも権力者による強硬・強行・強攻が続き、住民たちを巻き込む愚行に多くの人が心を痛めた1年となりました。これらの事実に対して、目を背けることなく、意思を表明し行動できる人をめざすには、やはり教育こそが国の基盤だと感じつつ大晦日を迎えています。

さて、本校においては、人数の制限や日数の制約などを受けながらも今年は予定した学校行事をほぼ実施することができました。これも一重に、生徒自身の慎重な行動と、保護者・ご家庭の皆様のご理解・ご協力の賜物と感謝しております。

学校行事では、生徒自身が主役となって、クラスメートや友人、部活動の仲間と手を携え、一つの目標に向かって額に汗して取り組む姿は何ものにも代えがたい「青春の証」です。終業式の講話でも取り上げたように、大人のように世間やしがらみのない純粋な世界は「若者の特権」です。世の中の状況に満足せず、常に高みをめざして挑戦していくことこそが若者の力です。少しぐらいの失敗なんて、後でいくらでも挽回が可能です。怖れてはいけません。他人と比較するのではなく、我が儘を通すのではなく、自分自身の内面との戦うことこそが本物の力です。

成功した喜びを思い描き想像しながら、「できる!」と言い聞かせ、努力を、工夫を、練習を重ねて行きましょう。諦めや無理という言葉は禁句です。立ち向かって行く勇気と耐える力!あなたならできる!こうした学ぶ姿勢が、将来のまだ見ぬあなたを作るのです。

「自分探し」や「夢を描く」ことではなく、あなた自身が主体となって「自分を変えること」「夢を目標に変えること」が大切です。AIやロボットの出現により、科学的知識や技術が急速に変わる21世紀の今、私たちが学校で学んだこと、今あるものはあっという間に古びたものになってしまいます。とは言え、どんな時代にあっても「私たちの心」は置き換えられることはできません。

つまり、十代の若い皆さんが中学・高校時代に身につけるべきことは知識や技術、正解を導く解き方だけではなく、数年後または何十年後に目覚めるかも知れない「学びの姿勢」を身につけることです。聖ヶ丘はそういう学校でありたいと願っています。小さな学校ですから、大仕掛けなことや派手なこととはできません。しかし、工夫することで「新しい自分と出会える」のです。それが聖ヶ丘の底力なのです。

さあ、2023年^{みずのとう} 癸卯も「新しい自分と出会う」ために、もっと感動を、もっと想像力・創造力を磨きましょう。良質な体験や読書、そして映画にも皆さんが知らない、経験できない貴重な出会いが詰まっています。年が明けると、高校2年生は先島諸島へ、中学3年生はニュージーランドへと、修学旅行での新たな出会いを通して探究活動に挑みます。続く後輩達のためにも、新たな「発見」「学び」を味わって来てください。仮想空間や画面上では味わえない一人ひとりの成長を願っています。

最後に私にとっての仕事以外の2022年年末は、20日に兵馬俑展(上野の森美術館)、25日に須賀川 拓監督のドキュメンタリー映画『戦場記者』(kino cinema 立川高島屋S.C.館)、30日にニューヨークミュージカル"シカゴ"(東京国際フォーラム)の観賞で、また年内最後の読書は筒井 康隆作の『モノダの領域』(新潮文庫)で幕を閉じます。どうぞ皆さんも一度しかない今を大切に、たくさんの経験を積んでください。

重ねて言いますが、「新しい自分との出会い」、それが学ぶことの本質です。信念をもって今日の学びを明日へ繋げて行きましょう。

こそ ことし
去年今年貫く棒の如きもの

高浜 虚子



兵馬俑展で購入した記念の落雁
(UCHU 京都市上京区藤木町)

校長 石飛 一吉